Osaka University Knowledge Archive

Title	モダリティの観点から見る「そうだ」と「ようだ」の相違
Author(s)	ウィッイー, ウー
Citation	日本語・日本文化研究. 2022, 32, p. 197-208
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/90728
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

モダリティの観点から見る「そうだ」と「ようだ」の相違

ウィッイー　ウー

1. はじめに

日本語の文末表現「（し）そうだ」（以下、単に「そうだ」）（例：雨が降りそうだ。）と「ようだ」（例：雨が降るようだ。）は類似した意味を表し、同じような状況で使われることも多いため、日本語学習者にとって両者を適切に使い分けるのは難しい。前者については、伝聞の「そうだ」（例：雨が降るそうだ。）という類似した表現もあるが、形式や意味は異なるため、本稿ではそれについては扱わない。「そうだ」と「ようだ」のような表現は、「モダリティ」と呼ばれ、日本語学の中で盛んに研究がなされている。どちらも、認識的モダリティに分類され、その中でも証拠性モダリティという同じ種類に属するとされ、両方とも様態や様相を表すと見なされることもある。共通点がある「そうだ」と「ようだ」について、意味用法から比較を行う研究も多くある。柏木（2001）は「そうだ」は眼前の状況・様子から次に来たるべき事態を推測し、「ようだ」は眼前の状況・様子そのもの自体が実は何であるのかを推測すると分析している。また、日本語記述文法研究会（編）（2003）では、「そうだ」は話し手がその事態を特徴との関連においてとらえていることを表すと述べ、「ようだ」は話し手が観察によってその事態をとらえているということを表すと述べた。大場（2015）では、「そうだ」はもともとは描写の意味だが、推量の意味もあると主張した。一方で、「そうだ」は「ようだ」や他のモダリティとは異なる特徴を多く持つ。本稿では「ようだ」と異なる特徴を持つ「そうだ」をモダリティと考えるべきか、そして、「そうだ」と「ようだ」の違いをどのような観点から説明できるかという二つの点に注目し、モダリティという観点から考察する。

2. 本稿の目的

「そうだ」と「ようだ」に関する研究は多く、研究者の見解もさまざまであるため、両者の差異をどのように説明すべきかは大きな問題である。従来、「そうだ」と「ようだ」は認識的モダリティに分類され、その中でも証拠性モダリティであるという共通点があるとされている。「そうだ」は動詞や形容詞・形容動詞の語幹（語基）につき、過去の事柄に対する判断を表すことができず、いくつかの否定形式があり、単純なモダリティ形式としてではなく接尾語的な存在とする考えもある（cf.龐 2004）。寺村（1979）は、モダリティ（話し手の主観的・主体的態度を表すムードという用語が使われている）としての考えに立って「そうだ」の活用形からその特徴を捉えた。寺村（1979）や龐（2004）のように、「そうだ」をモダリティの一つとして扱っている研究もあるが、その一方で、原田

（1999）や野村（2003）のように、典型的なモダリティではなく、擬似モダリティや周辺的なモダリティとして考えている研究もある。

モダリティは、いわゆる、機能語と呼ばれる文法的要素（functional word, grammatical word）に属し、内容語と呼ばれる語彙的要素（content word, lexical word）とは異なる文法的・意味的振る舞いを示す。「そうだ」は様態や予想などの抽象的な意味を表し、その形態も助動詞や接辞と見なされ、機能語・文法的要素であるモダリティとして扱われてきた。「そうだ」は、類似する意味を持つ「ようだ」や他のモダリティとは異なる特徴を多く持つ。表面的には類似する“文法的な”意味を表すとしても、その出所が文法的要素であるか、語彙的要素であるかによって、形態的・統語的環境が異なれば、それらの意味の分布や異同に差異が見られる可能性がある。もとより、機能語と内容語の区別は絶対的なものではない。意味が抽象的であったり、形態が接尾辞であったりするからといって、それを単純に機能語であると決めつけると、当該の表現の本質を見誤る恐れがある。

従って、本稿では、「そうだ」と 「ようだ」について、以下の二つの点から考察を行うことで「そうだ」と「ようだ」の相違を明らかにすることを目的とする。一つ目は、モダリティのような機能語が示す文法的な意味の特性と内容語のような語彙的要素が示す意味の特性の違いという視点から「そうだ」を「ようだ」と比較し、「そうだ」を文法的要素であるモダリティとして捉えるべきか、それとも、語彙的要素として捉えるべきかを明らかにする。二つ目は「そうだ」も「ようだ」も同じように「様態」を表すと言っても、何についての「様態」を表すかに注目し、両者の推論過程の相違点を明らかにする。

3. 「そうだ」と「ようだ」の相違

本稿では、文のタイプ、文法的要素と語彙的要素の意味、意味の変異などの観点から「そうだ」と「ようだ」を考察し、意味が類似する同種の文法的カテゴリーとして両者を扱うには、「そうだ」が極めて例外的な存在になることを指摘した上で、「そうだ」は「ようだ」と異なり、語彙的要素と捉えるのが妥当であるとの主張を行う。さらに、証拠性モダリティとして扱われることがある「そうだ」と「ようだ」の特性を再考し、両者の相違点を明らかにする。

3.1. 文のタイプ：過去形、否定形、疑問文

仁田・益岡（1991）は、モダリティには真正モダリティと擬似モダリティがあり、後者の中には、過去形にできる「かもしれない、ようだ、らしい、みたい」と否定形にできる「はずだ、そうだ」があると述べている。「ようだ」だけでなく、「そうだ」も過去の形式になる。

（1）　昨日は午後から雨が降りそうだった。

（2）　昨日は午後から雨が降るようだった。　（Bando 2019）

寺村（1979）なども、「そうだ」も「ようだ」もそれ自体が過去形になると述べている。Bando（2019）によると、副詞「昨日」は「雨が降る」ことではなく、「そうだった」や「ようだった」を修飾しており、「そうだ」や「ようだ」が過去であることを示している。この点では、「そうだ」と「ようだ」に差異はない。なお、「昨日は午前中に雨が降ったようだった」の文では、「た」形が埋め込まれた「降った」は「午前中」に修飾され、主節の「ようだった」は副詞「昨日」によって過去に指定されている（cf. Bando 2019）。

澤田（2018）によると、主観的な認識的モダリティは話し手の判断や思考の「力」の表出が前提とされている。こうした認識的な「力」の遂行が前提となっている以上、話し手の判断や思考そのものは否定されることはない。それゆえ、英語の法助動詞 may/must/should/will の認識的モダリティは否定されない。You may not have noticed it at the time. という文は「その時あなたは気づかなかったかもしれない」という意味を表し、「その時あなたは気づいた」という命題を否定したものであり、「その時あなたが気づいた可能性はない」というモダリティ否定ではない。つまり、not は、have noticed を否定し、may を否定していない。英語の法助動詞 may は日本語の「かもしれない」と「してもよい」という意味に対応する。疑問文の May I～ ?は「してもいいですか」を表し、「かもしれないですか」ではない。つまり、英語の may が認識的モダリティとして機能するとき、それは「かもしれない」の意味を表し、疑問文では使えないということである。したがって、否定と疑問では使いにくいということがモダリティであることの一つの基準になるだろう。

モダリティ自体の否定は、言表事態に対する把握のし方や発話・伝達のあり方に関して話者が判断したこと自体が存在しないことになる、すなわち、存在するのが前提であるものを存在していないと表現することになり、奇妙なことになってしまう。しかし、「はずだ」と「そうだ」はその形式自体の否定を有していて、それゆえ、真のモダリティを表したものではなく、擬似モダリティ形式に外ならないと仁田・益岡（1991）は述べている。

（3）a. 奥さんがそれほど疲れているはずはないでしょう。
　　b. 雨は降りそうでない。　（仁田・益岡 1991）

上の例が示すように、「そうだ」はそれ自体が否定形になる。さらに、「そうにない」「そうもない」「そうではない」など、いくつかの否定形を用いることができる。しかし、以下のように、「ようだ」は、基本的にそれ自体を否定形にすることができない（cf.寺村 1979 など；ただし、Bando（2019）のように、「雨が降るようでない」という否定形を許容する研究者もいる）。

（4）*雨は降るようではない。

次に「そうだ」と「ようだ」の疑問文について見てみよう。

（5）このお菓子、食べられそうですか。
（6）?このお菓子、食べられるようですか。

「そうだ」の疑問文は問題なく使えるが、「ようだ」の疑問文は不自然である。「ようだ」の疑問文が使用されるとしても、「そうだ」とは何について質問しようとしているかが異なるように思われる。もしこれらの質問に「いいえ」で答えるとしたら、（5）では「いいえ、食べられそうにありません」になるが、（6）に対し答えようとするなら、「いいえ、食べられないようです」のようになるのではないだろうか。（5）は、「食べられそうか、それとも、食べられそうではないか」を聞いており、他方、（6）は「食べられるようか、それとも、食べられないようか」を聞いているように感じられる。つまり、（6）は、「ようだ」の判断内容である「このお菓子は食べられる」という命題の可否について聞いていることになる。しかし、これは、話し手自身の判断内容が正しいかどうかを他人に質問する、つまり、「私が（「ようだ」によって）推測する内容は、食べられるということか、それとも、食べられないということか」を質問することになるため、不自然な質問となる。モダリティは話し手の判断や気持ちを表すので、「ようだ」は平叙文で話し手の考えを述べ伝えることはできるが、話し手の考えの正しさを相手に尋ねて、教えてもらうような疑問文では使えないのである。また、「ようだ」は否定形にならないので、「食べられるようだ」と「*食べられるようではない」のどちらかを選択させるようなことはできず、それを背景にする疑問文が成立しにくいということもこの背景にある。それに対し、「そうだ」は否定形にすることができるため、「食べられそうか」と「食べられそうではないか」の選択を要求する疑問文にすることが可能となる。

「ようだ」は過去形にすることができるが、否定形や疑問文は不自然である。一方で、「そうだ」は過去形に加え、否定形や疑問文にもなる。このようなモダリティとして特異な「そうだ」の文法的振る舞いは、従来、指摘されてきたが、なぜこのような振る舞いを見せるのかについては、「そうだ」がいかなる文法カテゴリーに属するかという観点から十分に吟味されていなかったのように思われる。「そうだ」がモダリティであることを出発点とすると、これらの振る舞いは確かに例外的であり、擬似モダリティの中でもさらに周辺的なものだと位置づけざるを得ない。しかし、「そうだ」が示す様態や予想などの意味が「ようだ」と類似しているように見えても、両者が異なる文法カテゴリーに属すると考えれば、「ようだ」が有しない「そうだ」の「例外的」な振る舞いはそれほど奇異ではないことになる。

3.2. 文法的要素と語彙的要素の意味

「そうだ」をモダリティ形式の中に入れるとしても、もっとも周辺的なものであるという論がある（cf.森山他 2000）。それは、「そうだ」をモダリティではないと捉えることもできる。以下の例を見てみよう。

（7）あの人は死んだようだ。
（8）あの人は死んだように眠っている。

（7）の「ようだ」は推量を表すモダリティとしては使えるが、（8）の「ように」が表すのはその意味ではなく、「比況」と呼ばれる、たとえや例示を表す比喩的な用法である（cf.寺村 1979、日本語記述文法研究会（編）2003、など）。（7）では「あの人は死んだ」は命題で、その後ろ（外）にある「ようだ」はモダリティであるという、文構造を成している。そのような構造において「ようだ」はモダリティという文法的な意味になることができる。しかし、（8）の「ように」はそのような構造にはない。また、（7）では、話し手は「あの人が死んだ」ことが事実だろうと判断しているが、（8）はそうではなく、事実ではないことを前提とした言い回しであり、文末の「ようだ」とは、いわば、反対の事態認識を示している。

次に「そうだ」の場合を見てみる。

（9）子供たちは楽しそうだ。
（10）子供たちは楽しそうに遊んでいる。

（9）と（10）では「そうだ」と「そうに」との間に意味の違いがない。もし「そうだ」も「ようだ」と同じようにモダリティであると考えると、文末形式以外でも「そうだ」がモダリティ的な意味を維持することが疑問となるだろう。しかし、「そうだ」をモダリティではなく、いわば通常の語彙的要素であると考えると、「そうだ」と「そうに」が同じ意味を維持することは不思議ではなくなる。「そうだ」をモダリティと考えない方が文の解釈や説明が容易になる。「ようだ」はモダリティとして「様態」を表すとされ、「そうだ」も「様態」を表すとよく言われる（cf.寺村 1979、大場 2015、など）。その意味の類似性を背景にして、従来、「そうだ」もモダリティの一種として扱われてきた。「ようだ」が文末以外の形式で使われると、その表す意味が変わり、モダリティではなくなる場合があるが、その場合でも、多くは、その意味を「様態」という言葉で言い表すことができるかもしれない。その際、モダリティ的な意味としての（推量概念を含む）「様態」と語彙的な意味の（見かけのみの）「様態」は異なる概念であることに留意しなければならない。それに対し、異なる形式間における意味の同一性の点から考えると、「そうだ」が示す

「様態」は、語彙的な要素としての意味であると捉える方がよいのではないかと考えられる。

3.3. 意味の変異

一般的に、文法的要素は、共起する語によって予測不能な特別な意味を生み出すことは少ない。一方、語彙的な要素では、特定の語と結合した際、想定外の意味の変異が生まれることは珍しくない。単純な意味の足し算ではなく、新しい意味を獲得したその種の表現は、それ自体が一つの語彙として辞書（レキシコン）に登録・記憶される。「ようだ」と異なり、「そうだ」にはそのような意味の変異が観察される。

3.3.1. 語との組み合わせ

「そうだ」は前に付く語と合わさり、全体が新しい意味を獲得することがある。「偉そうだ」は形容詞「偉い」と様態を表す「そうだ」から構成された表現であり、対象に対する評価を否定的に述べる際に使用される（cf.梶原 2014）。

（11）彼はいつもと違って今日は偉そうだ。
（12）彼はあのグループの中では一番偉いようだ。

「偉い」は、才能が優れている、人として立派である、社会的地位や身分が高い、といった、ふつうよりも優れているさまを表す、肯定的な意味がある。（12）のように「ようだ」を伴うときは、その意味通りの状態を示している。他方、（11）は、いつもよりも今日は立派だ、優れているという意味ではなく、威張っているというような否定的な意味を表す。「賢そうだ」の場合は、「賢い」という肯定的な意味が保持されているが、「偉そうだ」では「偉い」がその意味を変異させている。「偉そうだ」と「偉いようだ」の意味の構成を図示すると以下のようになる。（＋）は肯定的な（良い）意味合いを持つこと、（－）は否定的な（悪い）意味合いを持つことを表す。

（i）えらい（＋）＋そうだ＝えらそうだ（－）、（＋）
（ii）えらい（＋）＋ようだ＝えらいようだ（＋）

梶原（2014）によると、「ようだ」と「偉い」という形容詞が組んでも、マイナスの意味にならず、「偉い」の意味がそのまま残っており、一方、「えらそうだ」は形容詞「偉い」と様態の「そうだ」という構成要素の意味に完全には還元できないと述べている。「偉い」自身はプラスの意味を持っているのに、「そうだ」が接続するとマイナスの意味を持つ時がある。「そうだ」は共に付く形容詞などによっては、新たな意味を持つ、つまり、新たな語彙を作り出すことがあることをこれらの例は物語っている。「そうだ」がモ

ダリティであれば、「偉そうだ」は、「偉い」の原意をそのまま表すはずだが、当該の例ではそうではない。従って、「そうだ」は機能語である文法的要素のモダリティとしてではなく、この種の非構成的意味を生み出すことが珍しくない語彙的要素として機能していると考えるべきであろう。

3.3.2. 比喩的な用法

「ようだ」や他のモダリティ形式とは異なり、「そうだ」は比喩的な意味でも使われる。ここで言う「比喩的」とは、話し手が実は命題内容を真実だとは考えていないにも関わらず、表現的にはそれが事実だと考えているかのように述べているということである。

（13）元気そうですね。きみたちは試合の結果が気に入らなかっただろうにね。
（14）#元気なようですね。きみたちは試合の結果が気に入らなかっただろうにね。
（#は、当該の文脈で不自然であることを示す）

（13）の「元気そうですね」は、見た目は「元気にみえる」という印象を受けての発言であるような言い方をしているが、話し手は、相手を実際に元気であると考えているとは限らず、文脈によっては、上のように皮肉として言う場合もある。しかし、（14）では、「元気だ」という命題に対して、それが事実（である可能性が高い）だろうと推測する話し手の主観的態度を表している。つまり、聞き手が元気であると話し手が考えているというモダリティとしての意味があり、当該の皮肉の文脈で使用すると不自然になる。「ようだ」には、例えや例示を表す「比況」の用法がある。これは、当該の事態を現実だと述べるものではないため、（13）の使われ方と似ているように見えるが、比況の「ようだ」はそれが現実ではないことを文脈ではなく、意味として含んでいるため、「そうだ」とは異なる。上の文脈でも「あたかも／まるで元気なようですね」というのは不自然だろう。「そうだ」は、文脈によって非構成的な意味をもたらすことがある。これらは、話し手の主観的な判断を命題に対して表明するモダリティとは異なり、モダリティらしくない特徴だと言えるだろう。

3.4. 証拠性モダリティ

現代日本語では「そうだ」と「ようだ」は認識のモダリティで、その中でも証拠性を表すモダリティに入るとされる。仁田・益岡（1991）は、「ようだ」は何らかの状況を判断の根拠として推論すると述べている。次の例（15）では、リュックがあるという状況から、山から帰ったという推論を行っている。

（15）部屋にリュックがおいてある。彼は昨日山から帰ってきたようだ。

また、時間的に一種逆行的な関係の場合も「ようだ」は使える。

（16）部屋にリュックがおいてある。彼は明日山に登るようだ。

「リュックがおいてある」という根拠をもとにして推論したことを表すこれらの文における「ようだ」を「そうだ」に置き換えた下の例は、あまり自然ではない。

（17）部屋にリュックがおいてある。#彼は明日山に登りそうだ。

以下の例も見てみよう。

（18）部屋の中に韓国語の本がある。彼は韓国語を勉強するようだ。
（19）部屋の中に韓国語の本がある。#彼は韓国語を勉強しそうだ。
（20）明日のパーティーに人気俳優を招待した。#多くのお客さんが来るようだ。
（21）明日のパーティーに人気俳優を招待した。多くのお客さんが来そうだ。
（22）コップの縁まで水が入っている。#水がこぼれ出るようだ。
（23）コップの縁まで水が入っている。水がこぼれ出そうだ。

これらの文では、「そうだ」と「ようだ」は使用できる場合とできない場合とで異なる現われ方をする。（18）は、（15）と（16）と同じように、「ようだ」は使用できるが、（19）のように「そうだ」だと不自然になる。一方、（20）～（23）では、「ようだ」は不自然だが、「そうだ」なら自然である。なぜこのような相違が現れるのだろうか。

「そうだ」も「ようだ」も何かの根拠に基づいてある状況を推量しているとしても、その根拠の「種類」に違いがあるのではないかと思われる。（16）において、話し手は、「部屋にリュックがおいてある」という状況を根拠にして、「彼が明日山に登る」という事態が起こる可能性が高い（別の言い方をすると、未来においてそれが事実となる）と推論している。（18）も同様に、「部屋の中に韓国語の本がある」という状況を根拠に、「彼が韓国語を勉強する」ことを推論している。一方、（17）と（19）の「そうだ」文もそれと同じ推論過程を経ているなら、自然な文になるはずだが、実際はそうではない。その理由は、「ようだ」とは、推論の元になる根拠が異なるからだと考えられる。

（16）と（18）の前半の文は、単にリュックや韓国語の本が部屋にあることだけを述べているが、（21）と（23）の前半の文はそれより情報量のある内容となっている。例えば、（21）の前半の文は、単にパーティーがあるということだけではなく、そのパーティーに人気俳優を招待したという情報が含まれている。別の言い方をすると、（21）と（23）の文では、パーティーやコップが単に存在するだけでなく、それらが特定の特徴を備えていることを述べている。そして、後半の文の「そうだ」は、それらの特徴を判

断材料として、そのパーティーやコップについて起こるかもしれない事態を描写しているのである。これは、後半の文を「そうな」のように連体形に変えてみると、分かりやすい。（21）では「多くのお客さんが来そうなパーティー」、（23）では「水があふれ出しそうなコップ」であることを伝えているに等しいと考えられる。つまり、（21）は、「多くのお客さん」について、「彼らがパーティーに来る」というようなことを述べているのではなく、「パーティー」について「多くのお客さんが来る」というようなことを述べ、（23）も「水」について「コップからあふれ出る」というようなことを述べているのではなく、「コップ」について「水があふれ出る」というようなことを描写しているのである。このような描写ができるのは、パーティーやコップについてその描写の根拠となるに足る情報（特徴的な状況）が前半の文で述べられているからである。一方、単に物が存在することだけを前半の文で述べている（17）や（19）では、リュックや韓国語の本について、後半の文のような描写を導き出すのは難しい。存在するという事実だけに基づいて、「彼が山に登りに行きそうなリュック」であるとか、「彼が勉強しそうな韓国語の本」であるとかを結論づけるには根拠が薄く、それゆえ、「そうだ」文を続けるのは不自然だと判断される。もしこの分析が正しければ、リュックや韓国語の本について、後半の文の根拠となる十分な情報量（特徴付け）を前半の文が含んでいるなら、「そうだ」文は自然となることが予想される。

（17’）これは彼がずっとほしがっていたリュックだ。彼がこれを手に入れたら、すぐにでも山に登りそうだ。

（19’）漫画を活用した韓国語の学習書が出版された。これなら、漫画好きの彼も韓国語をがんばって勉強しそうだ。

つまり、「そうだ」は、ある“状況”に対して何らかの推論を行うというよりも、ある“モノ”について何らかの推論を行っていると言える。ただし、そのモノは、推論の根拠となる状況（特徴）を背景にもっている必要がある。

一方、「ようだ」文では「彼が山に登るようなリュック」、「彼が勉強するような韓国語の本」のように言い換えることができない。より正確に言うと、文末形式の「ようだ」が示していたモダリティとしての意味を保持しながら、言い換えることができない。なぜなら、「ようだ」を連体形にすると、終止形のときに担っていた推量のモダリティの意味とは異なり、単なる様態（比況）を表す意味になってしまうからである。しかし、「そうだ」の場合は、終止形の場合と連体形の場合でその意味に違いはない。両者のこの違いは、モダリティの「ようだ」は「リュックや韓国語の本」のような“モノ”についてではなく、「リュックや韓国語の本」が存在していること、すなわち“コト”そのものについて、そこからなんらかの推論を導き出していることを示唆する。つまり、「ようだ」はコト（事

態）について何らかの事柄を推論・判断するのに対し、「そうだ」はモノ（事物）について何らかの蓋然性の高い事柄を描写するため、モノを修飾する連体形にすることができると考えられる。連体形の「ような」もモノを修飾する形式になるが、推量を表す文末の「ようだ」のモダリティの意味がなくなり、「そうな」と似た、様態（比況）を表す意味用法になると考えられる。

以上の考察から、「そうだ」は、ある状況（特徴）を背景に持つモノについて、その状況（特徴）を根拠にしてある事態を推論し、「ようだ」はある状況（コト）について、その状況そのものを根拠にしてある事態を推論すると結論づけられる。ただし、何について描写しているかは異なるものの、状況（「そうだ」の場合は、モノがその背景に持つ特徴的状況）を根拠にして推論を導き出している点では、「そうだ」も「ようだ」も同じである。従来の研究では、この共通点（のみ）を重視したがために、両者を同列に扱い、「そうだ」もモダリティの仲間だと捉えようとする傾向があったのではないだろうか。「ようだ」と「そうだ」によって表明された判断にいたるまでの推論過程を図示すると以下のようになる。

「ようだ」：
状況・事態（コト）［＝根拠］　→　ある状況・事態を描写

「そうだ」：
事物（モノ）　→　それが備える状況・特徴［＝根拠］　→　ある状況・事態を描写

4. 結論

従来、「そうだ」と「ようだ」は、どちらも様態などを表すモダリティ表現として、その意味的な類似点や相違点の解明に焦点が当てられてきた（cf.中畠 1991、中村 2000、大場 2015、など）。モダリティは、発話時における話し手の主観的態度を表すことをその基本とするため、テンスやアスペクトとは異なる文法的振る舞いを示すことがある。例えば、話し手自身が自分の態度を否定したり、聞き手に尋ねたりするのは通常ではないため、モダリティは、否定形や疑問文で使われないことがその典型的な特徴となる。また、発話時の態度を表すということから、モダリティ自体が過去形にならないことも多い。本稿で扱った「ようだ」も否定形にはなれず、疑問文にすると、話し手が自分の態度や気持ちの真偽を聞き手に尋ねることになり、不自然な意味合いになる。それに対し、類似の意味を表すとされる「そうだ」は、それ自体が否定形にもなれるし、過去形や疑問文にもなれる。その点で「そうだ」の振る舞いは、他のモダリティ表現がある特性と大きくかけ離れる。

［［命題］モダリティ］という構造が示唆するように、モダリティは文末（終止形）に現れるのが基本である。それゆえ、「ようだ」は、文末形式ではない連体形「ような」や連用形「ように」にもなることがあるが、その場合は、モダリティとしての推定の意味は失われる。しかし、「そうだ」は、「そうな」のように名詞を修飾する時にも、「そうに」のように動詞を修飾するときにも、文末で用いられる時と意味に差異はない。（推定を表す）「ようだ」はモダリティであるが、「そうだ」はそうではないと考えれば、文末形式と非文末形式における意味の異同に関する両表現の違いは、何ら特別な付帯条件を課さずとも説明できる。したがって、「そうだ」をモダリティという文法的な要素ではなく、語彙的な要素として捉えるのが妥当であると結論づけられる。

最後に、本稿が明らかにしたように、「そうだ」も「ようだ」も同じように「様態」を表すと言っても、何についての「様態」を表すかにおいて違いがあることが見られた。「ようだ」は、モダリティに共通する特徴として、ある状況・事態（コト）に対して、ある蓋然性のある事柄を「様態」として言い表すのに対し、「そうだ」はある事物（モノ）について、ある蓋然性のある事柄を「様態」として言い表すという違いがある。また、「そうだ」はモノについて何らの蓋然性を表明していると言っても、それが言い表している事柄の根拠は、当該のモノがその背景にもつ状況や特徴であり、その状況・特徴をもとに「そうだ」文が表す事柄を導き出している。前章で結論づけたように、何に対して蓋然性のある（高い）状況・事態を述べているかは「ようだ」とは異なるものの、それに至るまでの根拠が類似している点では、「ようだ」のようなモダリティと類似した推論過程を「そうだ」も経ている。そして、それが、従来「そうだ」が、ある事態を受けて、その主観的態度・判断として別のある事態を表明するモダリティの一種だと考えられてきた動機になっていると考えられる。

本稿では、「そうだ」の個別具体的な意味や「ようだ」との詳細な意味的差異を分析するのではなく、モダリティの視点から「そうだ」と「ようだ」を比較し考察を行った。今後は、さまざまな活用形や接続詞との共起などにおいて、文末形式（基本形、終止形）の意味が維持されるかどうかや「そうだ」と「ようだ」の間で意味の分布が同じであるかなどについて詳しく分析を行いたい。

参考文献

大場美穂子（2015）「いわゆる様態の助動詞「そうだ」再考：「ようだ」との比較」『日本語と日本語教育』No.43 第 3 号、pp.1-18. 慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター

柏木成章（2001）「「そうだ」・「ようだ」・「らしい」」『大東文化大学別科論集』第 3 号、pp.55-70. 大東文化大学別科日本語研修課程

梶原彩子（2014）「「えらそうだ」についての考察」『言葉と文化』第 15 巻、pp.1-10. 名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本言語文化専攻

菊地健人（2000）「「ようだ」と「らしい」－「そうだ」「だろう」との比較も含めて－」『国語学』51－1、pp. 46-60. 国語学会

澤田治美（2018）『意味解釈の中のモダリティ（上）』開拓社

杉村泰（2000）「ヨウダとソウダの主観性」『言語文化論集』第 22巻第 1 号、pp.85-100. 名古屋大学大学院国際言語文化研究科

寺村秀夫（1979）「ムード形式と意味（1）—概言的報道の表現—」『文芸言語研究．言語篇』4、 pp.67-89. 筑波大学文芸・言語学系

豊田豊子（1987）「 そうだ （様態）の意味・用法と否定形（1）」『日本語学校論集』No.14、pp.1-13. 東京外国語大学外国語学部附属日本語学校

中畠孝幸（1991）「不確かな様相：ヨウダとソウダ」『三重大学日本語学文学』第 2巻、pp.26-33

中村亘（2000）「「ようだ」「らしい」「そうだ」をめぐってー事態の捉え方の違いという視点からー」『早稲田日本語教育』第 8 号、pp.13-24. 早稲田大学国語学会

仁田義雄・益岡隆志（編）（1991）『日本語のモダリティ』くろしお出版

日本語記述文法研究会（編）（2003）『現代日本語文法 4 第 8 部 モダリティ』くろしお出版

野村剛史（2003）「モダリティ形式の分類」『国語学』第 54 巻第 1 号、pp.17-31. 国語学会

原田登美（1999）「モダリティ論小考 —モダリティをめぐる日本語研究の 2 つの動向」『言語と文化』第 3 号、pp.123-136. 甲南大学国際言語文化センター

森山卓朗・仁田義雄・工藤浩（2000）『日本語文法 3　モダリティ』岩波書店

龐黔林（2004）「モダリティ形式としての「そうだ」について」『神戸女学院大学論集』第 51 巻第 1 号、pp.27-33. 神戸女学院大学

Bando, Michiko. (2019) “Japanese model auxiliaries -*sooda* and -*youda* and their -*ta* forms”, Theoretical and applied linguistics at Kobe Shoin 22, pp.1-13. 神戸松蔭女子学院大学学術研究委員会